

➤ 剣の神聖性をどう説明するか・・・
古代中国人の精神の最も深い所に根ざしていた思想により説明されていた

連載

刀剣の歴史と思想

第4回

酒井 利信

干将莫耶の宝剣伝説

古代中国において、最新鋭の武器であった剣は、太阿の剣に顕著であったように、その優れた実用性から神秘化されたことはこれまでに確認してきた通りである。さらにこれが、従来の中国思想を多分に吸収しつつ深みをおびて、独特の思想体系を形成していくこととなる。

太阿の剣とともに、中国の宝剣で看過できないものとして干将莫耶がある。この宝剣に注目することによって、古代中国の刀剣思想にもう一步、踏み込むことができる。

▼干将莫耶の伝説

干将莫耶は、古代中国を代表する名剣の名前である。

日本の『今昔物語』や『太平記』にも記されており、また古代朝鮮の『三国史記』に似た話が記述されているなど、中国のみならず東アジア文化圏の中で、太阿とならんで影響力をもつ名剣であることは間違いない。

この類まれな名剣を作った剣工は、欧冶子とともに太阿の剣を作った干将与、その妻である莫耶である。つまり、非常に紛らわしいのであるが、宝剣の名と製作者の名が同じということである。

干将莫耶の伝説は、さまざまにアレンジされて諸書に語られているが、まずは最も基本となる文脈を把握することからはじめたい。

干将与莫耶の夫婦は、王の命令で、最高

一対二振りの剣
夫婦の剣工



干将莫耶の伝説
二部構成
・作剣の描写
・復讐談

刀剣の歴史と思想

第4回「干将莫耶の宝剣伝説」

の材料をそろえ、最適の条件を整えて鉄を熔かし、苦勞して陽剣と陰剣の二振りの剣を作り上げた。これらのうち陽剣の名を干将といい、陰剣を莫耶といった。

干将は、陽剣は隠しておき、陰剣のみを王に献上した。

王は、実は宝剣は二振りあり、陽剣が隠されていることを知って怒り、ついに干将を殺した。

この時、妻の莫耶は身ごもっており、干将が殺された後に子供が生まれた。子の名を赤という。息子である赤は、父の遺言により隠されていた陽剣を探しあてて、王に復讐しようとする。復讐の意図を知った王は、懸賞金をかけて息子を探し出そうとするが、赤は山に逃げこみ、そこで出会った旅人から仇討ちの方法を提案される。その提案とは、懸賞金のかかった赤の首と、隠され献上されなかった陽剣を王のもとへ持っていく、自分がかわりに仇をとるというものであった。赤は即座に承諾し、剣で自らの首をはねた。旅人は陽剣と赤の首をもって王に拝謁し、隙をついて王の首を斬り、見事に仇討ちの代役を果たした。

以上が、最もオーソドックスな干将莫耶の伝説の大凡である。

この宝剣伝説は二部構成になっている。すなわち、宝剣誕生の作剣の描写と、息子が殺された父干将の仇討ちをする復讐談である。

作剣の話は、『呉越春秋』に詳しく記されている。『呉越春秋』は、後漢の趙曄の著とされ、春秋末期の呉越の興亡の歴史を中心に記したものである。『越絶書』と同様に歴史と小説の間に位置づけられるもので、この時代の中国刀剣思想を考える上で欠くことのできない重要な史料である。当史料に、後日談としての復讐の話は記されていない。復讐談については『捜神記』に記述され

ている。『捜神記』は、東晋の干宝作の古小説集である。当史料では、作剣については「楚の干将莫耶は楚王の為に剣を作る。三年にして乃ち成る」(干将と莫耶は、楚王のために三年かけて剣を作った)と記されるのみで、詳細にふれることはなく、



後漢の趙曄の著とされる『呉越春秋』
(『呉越春秋』四部叢刊本、商務印書館より)



★作劍の描写が重要

記述の中心は復讐談についてである。

なお、『呉越春秋』では、干将と莫耶は呉国の王である闔閭の命によって劍を作ったと記されているが、『搜神記』では楚王のためとされており、両書の記述に違いがある。

▼作劍談に潜む中国思想

通常、干将莫耶の宝劍をめぐる話としては、子が父の仇を討つ復讐談に興味がある場合が多いが、刀劍の思想ということに焦点を当てた場合には、むしろ劍工である干将莫耶による作劍の描写が重要となってくる。

以下、『呉越春秋』の記述である(2)。

干将の劍を作るや、五山の鉄精を采り、六金の英を合し、天を候い地を伺い、陰陽光を同じくし、百神臨み觀、天氣下降す。而れども金鉄の精銷ず淪流れる。——中略——莫耶曰く、夫れ神物の化は人を須ちて成る。——中略——干将曰く、昔、吾が師

の冶を作すや、金鉄の類銷ざれば、夫妻俱に冶爐の中に入れり、然る後に物成る。——中略——莫耶曰く、師身を爍すを以て物成るを知る。吾何ぞ難からんや。是にて干将妻乃ち髪を絶ち爪を剪り爐中に投る。童男童女三百人をして鼓囊装炭せしめ、金鉄乃ち濡い、以て遂に劍成る。陽に曰く干将、陰に曰く莫耶。

非常に分かりにくい文章であるが、要約すると以下のように解釈できる。劍を作るのに、山々から鉄を集め最高の材料を用意し、最適の環境を整えたにもかかわらず、鉄は爐の中で熔けなかった。莫耶



蘇州市虎丘の劍池には、呉王闔閭が名劍とともに埋葬されていると伝えられる(写真提供＝山口直樹氏)



刀劍の歴史と思想

第4回「干将莫耶の宝劍伝説」

が言うには、神聖な物は人によって成るものだ、と。そして干将が言うには、昔、私の師は、鉄が溶けないとき、夫婦で爐の中に入って鉄を溶かしたという。この話を聞いて莫耶は、自らの髪と爪を切って爐に投げ入れ、童男童女三百人に炭を入れさせてふいごを吹かせたところ、鉄は熔けて、遂に干将与莫耶という二振りの劍が完成した、といった内容である。

劍の神秘性を作劍の過程において説明していることは間違いないが、どうもこの文章は劍を作るための現実的な手順を記しているようには見えない。前に『越絶書』は、鉄劍の神威を鉄器が最先端文明であるからと説明したが、『呉越春秋』がここで述べるものは、最先端の鉄器を作る仕方を説明しているにしては、あまりにも意味不明な文章である。ここには、別のモチーフがあることは確かである。

先学においては、夫婦で爐に入ったり、髪や爪を爐の中に投げ入れたといった描写に注目して、製作者の人間としての生命力を劍に注入したために聖なる劍が誕生したと解する理解の仕方がある。これはもっ

ともな理解の仕方だ、あえてこの解釈を否定はしないが、私はこの話にはこれとは別のモチーフが潜在しているように思う。

どうして劍の製作者が干将与莫耶の夫婦二人なのか。「天を候い地を伺い、陰陽光を同じくし」といった、天地、陰陽といった概念を含んだ意味不明な描写がなされているのはなぜか。どういった理由で、夫婦で爐に入り、「童男童女」という男女でふいごを吹くのか。そして出来上がった劍が陽劍と陰劍、二つあるのか。

本来、劍は一人で作ってもよいし、意味不明な文章はさておいて、一人で爐に入っても人の生命力は付与されただろうし、男女でふいごを吹く必要もない。そして宝劍は一つで十分であるとも考えられる。私はこのことに注目したい。

こういった夫・婦、天・地、陰・陽、童男・童女という対立する事象を、執拗しつぱうに係づけて述べるこの描写には、古来の中国思想が潜在しているように思う。

劍の神聖性を作劍の過程に求めて、かつ対立する概念を強調しつつ記述される描写は、『呉越春秋』のこの場面のみにみられ

るものではなく、他にも確認することができ。特殊な事例でないことは確かである。では、この文章がわれわれに主張するものは何か。

易の思想の関与

ここからの話は、特にわれわれ日本人には分かりにくい。

劍の神聖性を語る伝説において、対立する概念が執拗に述べられていることに気づき、私自身このことに注目したものの、当初、それ以上の深い考察をすることができなかったが、そこに潜在する古代中国の思想について、東洋思想を専門とする高橋進先生から重要なサジェスションをいただいた。これを含めて、以後、考察を進めてみたい。

古代の中国人は、物事をすべて対立する事象から理解しようとしていたようである。そして、対立する事象は、単に対立しているだけではないと考えた。一般的に、上と下、前と後、難と易、緩と急、陰と陽





高橋進先生（左）と筆者（1997年当時）

などのように、対立する概念または事態・事象は、前があるから後があり、後は前があるから、難しいは易しいがあつてのこと。陰陽も陰だけ、陽だけでは成立せず、陰と陽が互いに「あい待ち合つて」陰陽になる、という理論である。

世の中に男だけしかないければ、自分が男であるということに気付かない。女という存在があつてはじめて男であるということとを自覚するように、対立関係にあるものは必ず他方があるからもう一方も存在す

る。ここに対立はあつても分裂はない。この関係を相待（あい待ち合っている）という。

こういった考え方を、易的論理といっている。こういった世界観は、高橋進先生やその師である原富男博士、そしてその系統を継ぐ学派が主張するものであり、少し難しい言い方になるが相待観的世界観という。

また、中国思想では、対立・相待にある事象をひっくり返して象徴的に陰と陽とし、世の中のもの全てはこの陰と陽の組み合わせによって出来上がっていると考えた。

干将莫耶の伝説の背景には、こういった世界観があつた。作劍の話において、現実的な金属器としての劍を作成する手順とは別に、対立する事象が執拗に述べられるのには、こういった世界観の反映がある。

しかし中国思想においては、全てのものが、陰と陽に象徴される対立・相待にあるものから構成されている。『呉越春秋』では、単に劍もそうだとすることを述べるためにこういった描写をしたのではないだろう。ここに語られているものは、普通の道

具ではなく、当時神秘化される傾向にあつた劍であり、さらに劍の中でも特に名劍といわれた干将莫耶の作劍の様子である。ここには中国思想のさらなる深みが潜在している。

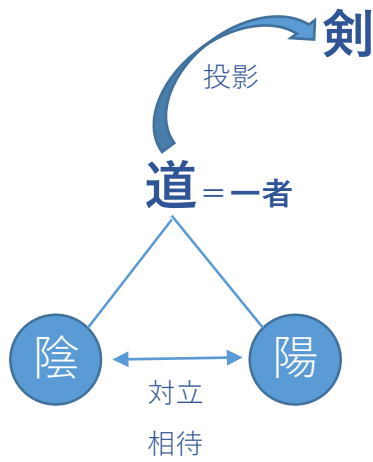
古代の中国人は、非常に具体的かつ合理的にものを考えるため、物事をよく観察して、万物を対立・相待ということとで理解したが、さらにもう一歩踏み込んで、対立・相待にあるものがなぜそういった存在のしかたをするのかということの問題にした。例えば、人間がなぜ男と女に分かれているのか、男と女に分けているところのものがあらずであるということである。つまり、これらを統一してそうさせているもの（原理・法則あるいは型）を、一つ高い次元において考えた。それが道という存在である。『易』に「一陰一陽之謂道」③（一陰一陽これを道という）この世界に存在するもの・ことは、あるいは陰となり、あるいは陽となり、生成変化消滅をくりかえしている。それを道（道）と記されているのは、そのことである。

つまり、万物は対立・相待するものの組



み合せによって出来ているが、これを高い次元から統一するものとして道がある。これ自体に、対立も相待もない。一つである。いわば一者である。道が形而上的な一者とすれば、陰陽、緩急、前後などは形而下的である。次元が異なる、ということである。

剣を作るのに、対立・相待するものを執拗に注ぎ込んだのは、この宝剣そのものに、これらを統一する高い次元の一者としての性質を見ていたと考えられないだろうか。そうして作られたからこそ、干将莫耶は神聖であった。そういった剣を、剣工である干将与莫耶は作ったという描写である。



この話の面白いところは、出来上がった剣が陰陽二つあるところである。この二振りが揃ってはじめて、陰陽を俯瞰して高い次元から統一する神聖な剣となりうるので、両者が一体であることに意味がある。王の怒りをかい父干将が殺され、子が復讐を企てるといった騒動も、両者が揃っていなかったことに起因しての話である。この名剣の神聖性の根拠が、陰陽一体であることを如実に物語っている。はじめから一本の剣であれば、こういった性格は見えにくい。この話は、当時中国の刀剣思想をうまく表現しているように私には見える。背景にある思想は易の思想であるが、こ

れは道教や儒教といった宗教が確立してくると前の、古代中国において原始的なものの方である。干将莫耶の宝剣伝説において、剣は、対立・相待にあるものを統一するものとして、まるで易でいうところの道を具現化するかのごとく神聖視されていた。

註

- (1) 『搜神記』巻第十一
- (2) 『呉越春秋』闔閭内伝
- (3) 『易』繫辞上伝
- (4) この思考を後に記した文献が、『易』(『周易』)であるといわれている。

